



## 羅針盤

清島 真理子

Mariko Seishima

岐阜大学医学部皮膚科 教授



## 口腔粘膜の発する異常シグナルを見逃すな

口腔粘膜病変は、狭い範囲の粘膜におこるドラマにたとえられるが、多くのことをわれわれ皮膚科医に教えてくれる。口腔は次のような解剖学的、機能的特徴をもつため、多彩な病変を生む。

①口腔は鼻腔とともに空気が体内に入る重要な入口部であるため、大気中の微生物や化学物質などの外的刺激に常に曝される、いわば最前線の戦場である。さらに食品、飲料などのアレルギー物質にも曝露される、アレルギー感作および惹起の場でもある。

②口腔は平坦な粘膜のみで構成されているわけではない。歯牙があり、舌があり、口蓋、扁桃、咽頭、歯肉があって、非常に入り組んだ構造をとる。歯牙は咀嚼において重要であり、齲蝕は common disease である。また治療として用いられる金属やセラミック、その他の異物としばしば共存することも口腔の特徴である。舌は消化、構音のほかに味覚という重要な機能を有し、舌由来の疾患のほかに、全身疾患の部分症状として特徴的な病変を示す。舌だけでなく口蓋、扁桃、咽頭、歯肉に関連した種々の疾患もある。

③唾液が常に口腔粘膜を潤していることも、口腔の特徴の1つである。潤すだけでなく口腔内を洗浄し、消化にも関与している。

ところで、筆者が口腔粘膜病変に興味をもった始まりは、西山茂夫先生の『口腔粘膜疾患アトラス』（文光堂、1982年刊）であった。とにかくきれいな写真に圧倒され、口腔粘膜病変からこんなにいろんな疾患がわかるのかと感動した。海外に眼を向けると1987、1997、2003年に Roy S. Rogers III 先生の編集された“Dermatologic Clinics”（Elsevier社）の oral dermatology 特集が網羅的で勉強になったが、残念ながら一部はモノクロの写

真であった。Rogers 先生は、2016年にも Clinics in Dermatology の特集号を編集されており、これら以外にも口腔粘膜病変について、いくつかの書籍を出版されている。

口腔粘膜病変の学問は英語圏では oral dermatology, oral medicine とか stomatology とよばれており、欧米では dentist と physician が主体となって診療にあたっている。hard tissue（歯牙と骨）と soft tissue（粘膜や軟部組織など）の両者について十分な知識が必要で、皮膚科、耳鼻科、歯科・口腔外科の境界領域であるため、疾患によっては各領域医師との協力体制が必要であろう。

口腔粘膜疾患の診断・治療は、まず患者さんに大きく口を開けてもらって口腔粘膜を観察することから始まる。何が異常所見か、普段から正常と異常の口腔粘膜所見に習熟しておく必要がある。口腔粘膜の基本的疾患やその概念は大きくは変わらないにしても、新事実が明らかになって少し概念が変わったり、今まで診断できなかった症例が新しい疾患概念として認められるようになったりと、皮膚科学は進歩し続けている。したがって、口腔粘膜疾患の今を知ることは、皮膚科医として重要である。

本号では、日々の皮膚科診療で口腔粘膜病変を観察するのが楽しくなる特集を目指し、oral dermatology の今を知る20の疾患を選択した。まず、典型のおよび非典型的な粘膜病変を知ることが重要である。粘膜を観察する習慣を身につけると、今まで気づかなかった新しい真実が病変にみえてきて、皮膚科の世界が広がる。口腔粘膜の発する異常シグナルを見逃さず、しっかり捉えたい。そのために役立つ一冊になることを期待している。